



湖の子戸田で大暴れ

去る7月29日、30日の二日間、琵琶湖漕艇場において、関西選手権が行われ、我が同志社大学対校エイトは、見事12年ぶりの優勝を果たしました。Jr.エイトも決勝に進み、関西での同志社パワーを見せつけてくれました。

関西でトップの座についた。では、全国でどれだけ我が同志社パワーが通用するものだろうか。インカレ、全日本、オッ盾まで残り1ヶ月。部員の気持ちは、もうすでに戸田オリンピックコースへと向っていました。

8月24日、25、26、27日の4日間、戸田オリンピックコースにおいて行われた、インカレ、全日本選手権、オックスフォード楯レガッタでは、他のクルーに見劣りしないローイングを、そして他の大学ボート部に勝るほどのパワーを発揮してくれました。関西の同志社ではなく、全国の同志社であることを確信しました。

インカレ・全日本レース回想

対校2番 榊原雅也

<インカレ>

予選は静水無風の絶好のコンディションの中、小樽商科大、東京大、立教大、名古屋大、同志社大で行なわれ、我々はその中で打倒東京大でレースに臨んだが、意外にも500mで視界から消えたのはノーマークの小樽商科大であった。だが我々は関戦優勝の自信から冷静であり、1000m付近で小樽商科大を捕え、ゴールでは2位に約6秒の差をつけ6分1秒で通過する事ができ、部員全員メダルへ期待をもった。

準決勝では予選での自信が油断とならぬ様注意したが、誰もが幸運な組み合わせと意思がいつってしまったのが、出だしたから苦しいレース展開となった。だが1年間のハードな練習においてどんな極致に立たされようとも負けないだけの精神力と体力を身につけた我々は地力で決勝進出を果たしたが、決勝を前にして課題の残るレースであった。

決勝は予選と同じ静水無風の中、早稲田大、日本大、慶応義塾大、同志社大、中央大で争われた。準決勝のタイムでは他の4クルーに比べ10秒遅く通過しているが、誰もそれに不安を感じる者はいなかった。その自信には近年低迷している同志社大ボート部を飛躍させる為、質と量の練習をこなしてきた裏付けがあった。500mでは最下位であったが、1000m過ぎまで早慶に一艇身差でついており1500m前で、ついに早稲田を捕え慶応をも抜きにかかったが惜しくも届かず結局6分1秒で4位という結果に終わり、優勝は中央大にさらわれた。4位で表彰式は悔しく、翌日の全日本決勝に望みを託した。

<全日本>

全日本決勝は前日とは打って変わり台風が直撃し逆風で白波のたつ中、インカレ上位4クルーに全日本予選通過のトヨタを加え5クルーで争われた。500mまでは水しぶきで前の漕手の姿も見えない程で、その時既にWILDROVER XIのトップボールは水面下に潜っていた。その状況でインカレ同様我々は最下位で、一艇身先に中央とトヨタが力漕していた。1500mで中央を捕え、1800mでは遂にトヨタを捕え3位に浮上したが束の間、腹切りがあり艇が止まってしまい、その後の必死の反撃も及ばず4位でゴールした。タイムは7分22秒であった。

今まで味わったことのない悔しさの中、そしてここまで堪えて練習してきたことを回想する中、私は来年のインカレ、全日本優勝を固く決意した。私一人ではなく、他の部員も同じ気持ちを抱いたのではないと思う。最後になりましたが、マネージャー、トレーナー及びコーチ等、対校エイトを支えて下さった方々に深く感謝いたします。

関西選手権レース回想

対校7番 吉田拓生

大会前のクルーの状態は、朝日レガッタ前と比べて最悪のものであったが、目標はもちろん優勝であった。

(予選)

7月29日12時30分。相手は1レーンから関大、同志社、大阪府立大、関学。練習量に裏付けられた自信と、朝日、関大同立での大勝で勝算は十分あった。予選ということで少し硬さがみられた、苦手なスタートで関大に先行された。自信のコンスタントも思うように伸びず、足蹴りの連発とラスト300mのスパートで関大を抜き、半艇身の差をつけゴール。予選タイム1位で準決勝へ進んだ。

(準決勝)

30日午後。晴天無風絶好のレガッタ日和の中、相手は京大、阪大。京大は、過去何度か対戦したが負けたことがなく、我々にとって組み易い相手であり、阪大など取るに足らない存在であった。そしてスタート。遅れるはずのスタートであったが、飛び出してしまう、先行逃げ切りの経験のない我々にとって、逆にコンスタントがのびず、苦しいレースであったが、なんとか前半のリードを守り抜き、トップで決勝進出を決めた。



対校エイト (coxから、功力、田中、吉田、坂本、佐藤、宮崎、西田、榊原、三上)

(決勝)

2時間後の決勝レース。1レーンから同志社Jr, 京大農青会, 京大, 同志社。インカレ, 全日本で関東のクルーに對抗し, 優勝するには, 関西のクルーには負けるわけにはいかない。スタート地点へ向うと, 自然と闘志が沸き, クルーのムードは最高潮に達した。そしてスタート。京大が飛び出したが同志社も半艇身でついていく。コンスタントで必死に追いあげるが, なかなか縮らない。ラスト300mでのスパートで並び, こん身の力をこめたダブルスパートでついにトップ, そのままゴール。優勝。同志社にとって12年ぶりの優勝であった。

長い間忘れていた, 勝利のよろこびを胸に8月のインカレ, 全日本で, 優勝を目指すこととなった。

対校の良きライバル Jr エイト

Jr エイト 大竹 宏

朝日レガッタを準々決勝で負けてしまうという不本意な成績を取めはしたが, それ以後の中日本レガッタを5位, 関西選手権を4位と, メダルまでは届かなかったものの, Jr クルーとしては, それなりの成績を取ることができたと思う。しかし, 我々 Jr クルーはそれに満足したわけではなかった。着実に速くなってきてはいたが, レースごとに反省することはまだまだたくさんあった。試合はあとオッ盾を残すのみとなり, なんととしても決勝に行き, メダルを取りたいという気持ちを皆持ち, 練習に更に励むようになった。

我々 Jr クルーには二つの大きな目標みたいなものがあった。一つは, うちの対校よりも技術的にはともかく, 練習量では絶対に負けないという目標である。もう一つは, 練習をするに際し, レースと同じような心構えで挑み, 常に自分自身にプレッシャーを与え続けるという目標である。実際, 8分パドルをするにしても, 1セット目ですでに, オールアウトしてしまうぐらいの気合いを入れてのぞんだし, 皆んなもそれを実行すべく努力した。この二つの目標をふまえた上で, 残りの一ヶ月を今までのレースの反省点を克服すべく練習した。そして, 着実に自分達の艇が走るのを感じるようになり, これならいけるという自信もつき, やれることはすべてやったという気持ちで戸田入りした。しかし, 戸田入りしてから艇が思うように走らず, 瀬田でのスピードが出ないまま予選を迎えなければならなかった。予選ではスタートから出遅れ, 終始我々の漕ぎが出せずに京大 Jr, 明治大に次いで3位となり, 明日の敗復にかけることになった。ところが, その当日何人かの者が水にあたってらしく, 腹痛を訴え, クルーとしては完璧な形で試合にのぞむことができなかった。レースはスタートからうまくとび出すことができ, このまま最後までいけるのではないかと思いが, ラストスパートで艇がのびず, 1800mあたりで新潟大, 金沢大につかまり3位という結果になった。

レースについての感想は特にないが, 今までやってきたことをレースに生かすことができなかつたのがとても悔しかった。他のメンバーも同じ気持ちだったと思う。今シーズンは, Jr でやってきたことをいろいろな形で生かしていきたいと思う。

これからの同志社ボート部を担う第3エイト

第3エイト 原田 昌彦

フォアを組む予定がいきなりエイトを組むことになり, 本当に漕げるだろうかと不安だったが, 石橋さんをはじめとする4回生の方々に教えていただいた結果, なんとか漕げるようになった。京都選手権をはじめ, 幾多のクルーと並べたが, 1度も勝てず, クルーの雰囲気も暗くなった。これが第3エイトの欠点で, 石橋さんをはじめ全員で雰囲気をよくしようと, 声を出したりして欠点を直そうとした。そのまま関々同立戦をむかえ, 見事優勝した。その勢いで瀬田杯も優勝目指して勝負したが, そんなに甘くはなく, 惜しくも準決勝で負けてしまった。

次に, オッ盾に出場するかが問題になったが, もう1度, 今度こそやってみようということで参加することになり, オッ盾まであと3週間あまりであるが, もう1度1からやり直そうと9人が1つになり, 夏の暑い練習をこなした。レース真近になり, またポジションの変動があり, 疑問を感じた。クルーのほとんどの人が戸田は初めてということもあって, 初めは, 他のクルーに圧倒されるばかりだったが, そのうちまわりの雰囲気にも慣れ, こっちに来て変わったポジションにも少しは慣れてきた。予選から数々の強豪クルーとあたり, その上2000mが初めてということもあったので, 全然歯が立たなかった。残念ながら予選は通過することができなかったが, クルーとしては, そんなに悪いレースではなかったし, 敗者復活戦の組み合わせでは, 予選のタイムからすると2位だったので, 予選の時と一緒のようにやれば勝てると思った。私達も4回生の方にとっても, これが最後のレースにならないよう, そして我がクルーの目標である準決勝進出を果たすように全力を尽した。だが, 結果は5位で敗れてしまった。結局一勝もすることができずに, 今年の第3エイトの戸田は終わってしまった。春からずっと一緒に漕いで, 色々教えていただいた4回生はもう引退。あとに残った私達は4回生の方に教えていただいた事を思い出し, 今年の夏の悔しさをいつまでも忘れずに, 来年こそは1人でも多く対校エイトに乗って全日本で上位入賞を果たしたい。



Jr エイト (cox から, 津嶋, 小原, 岡田, 乾, 重松, 大竹, 山下, 吉田, 畠山)

今シーズンを振り返って

4回生から一言

主将 坂本 龍一

今シーズン, 高校生レベル以下からスタートした我々が全国レベルに達する事が出来た背景には, とにかく練習する, とにかく漕ぐという事しかなかったように思う。豊富な練習量と充実した練習内容からくる「俺達は負けない」という自信が, 数々のプレッシャーを撥ね除け, 結果, 近年稀に見る飛躍の年となる事が出来た。しかし, それでも日本一には届かなかった訳で, 後輩諸君には現状に満足せずさらに上を目指して頑張ってください。

最後になりましたが, 大変苦労をかけたマネージャー, 一年間一緒に奮闘された首脳陣, 学生コーチ陣のみなさん心から感謝します。

主務 朝倉 伸二

結局, 最後の最後まで至らない主務のままで終わってしまいました。それでも何とかやってこれたのは, 自分以外のマネージャー達, 艇を降りた同期の者, OBの方々をはじめとして本当にたくさんの人達に助けて頂いたおかげだと, 心から感謝しています。

自分が一年間もう少しがんばってれば, あのレースもしかしたらトヨタに勝つたのでは……と思えるのは引退して, すでに2ヶ月がたっているからでしょうか。

副将 西田 利彦

自分が本当に勝ちたいと思ったときは, 激しく自己主張すればよい。たとえクルー内に葛藤が起こったとしても, 「和して同せず」の厳しい姿勢を持ち続けていれば, 摩擦を推進エネルギーに変えることができるはずだ。スタート地点につけるまで全力を尽くし, 自分自身はもちろん, 対戦相手にも, 観客にも, 誰にでも, 「同志社が勝つべきだ。同志社に勝って欲しい。」と, 自然に思わせるようなクルーを目指してきた。後輩諸君, この“無敵の状態”を極めて下さい。

副務・会計・配川 隆司

念願のメダルには及びませんでした。しかし, 皆本当に頑張ってくれました。内容としては, 合格点を大きく上回るものであったと思います。私自身, 良き先輩, 同僚そして後輩に支えられ, ここまでやって来ることができました。自分にとって, つい一か月前までボートに熱中していた時が確かにあったのだということが, 突然思い出され胸が熱くなる時があります。かけがえのない時間をもつことができたこと, 感謝します。

トレーナー, 学連 米原 栄一

ボートは意思の強さが大切だ。でも, 普通は意思より勢いで四年間が過ぎてしまう。特にマネージャーはそうであった。今, 僕は勢いのつきすぎで, 平凡な男には戻れなくなってしまった。

体育会本部 佐伯 誠

2回から本部出向という形で続けてきたボート部であった。外からボート部を見てきた時間のほうが長かったわけだが, 全体育会の中でも最高のクラブだと思われ, その中での4年間の大学生活は心, 技, 体とも充実し, 大変良かった。

来年からは, 今年以上をと言うことでますます厳しくなると思うが自分を見失わないよう足を地に付けて頑張ってもらいたい。

女子マネージャー 川崎 優子

長いようであつたという間の四年間でした。その間いろいろなことがあり, 何度もやめようと思いましたが, 今振り返ってみると, やはり続けてよかったと思います。井上・中村, あと一年頑張ってください。

島田 恭典

4年間のボート部での生活を一言で振り返るなら, 最後に結果が出たことが一番嬉しかったです。同志社大学ボート部で4年間頑張れたと言うことを, これからは誇りにしていきたいと思えます。合宿所での生活も練習で苦しかったことも, もうこんなことはないのかと思うと寂しく思えます。最後まで悔いのないように日本一を目指して頑張ってください。

前田 崇

今シーズンは, 途中からトレーナーとして, 慣れないながらもやって来ましたが, 終わってみると, いったい何ができたのかと後悔ばかり残ります。選手, マネージャー問わず, 精いっぱいがんばってください。

内藤 正樹

“同志社”今年はこの三文字に尽きると思う。今年度の目標を全員で達成できることができ, 全日本では“同志社旋風”を巻き起こした。今年度の再出発点として同志社の時代がこの先十数年は続くことを確信している。全日本の経験を生かし, 全日本決勝常連組として同志社の名を定着できる様, 後輩諸君の健闘を祈る。又, ボート部時代のこの様な経験が自分にとって立派な社会人として活躍できる自信につながると確信しています。

石橋 雅信

辛いこともたくさんありました。最後の年に良い結果を残せて満足しています。4年間のボート部生活の中で、色々な立場を経験した訳ですが、やはり言えることは、それぞれの立場で精一杯頑張ることがクラブ全体として向上して行くための唯一の方法であると思います。漕いでいる人は勿論のことですが、マネージャー、トレーナーが漕手と同じくらい頑張ることが勝てる雰囲気生まれるはず。今年はインカレ優勝を十分狙える位置にあると思います。期待しています。

喜多 隆博

闘志を漕ぐことで表現できなくなった時。陸に上がった人間はその時こそ、それまで以上にエネルギーを使わなければならないのではなからうか。決して闘志を失ってはならない。かつまた陸でがむしゃらになっても勝ちにはつながらない。

タイプは各個人違って当然だが、目指すものは唯一つであるということ。個人的にはいい勉強ができたと思う。今後の同志社の大健闘を祈ります。

後輩から一言

4回生の皆さん、本当に御苦勞様でした。

新体制1年目ということで、何かと御苦勞の絶えなかったシーズンであったと思います。そんな中で、それぞれぶんの役割を探し、その役割を立派に果たされたことと思います。誠に至らない後輩で、何かと御迷惑もおかけしましたが、もう4回生の方々と寝食を共にすることも、ボートを漕ぐこともないと思うと、寂しい気が致します。

それぞれの想いを胸に瀬田を去っていかれるわけですが、どうぞいつまでも熱いまなごしをこのボート部に送り続けて下さい。

本当にありがとうございました。

新主将あいさつ

三上 和彦

新体制のもと、2年目のスタートをすでにきりました。昨年度の結果は、良い意味でも悪い意味でもプレッシャーとなっています。しかし、今年度は決して昨年度の真似ではなく、僕たちのカラーを出していきたいです。本来なら、こういう場では「来年は全日を狙います」等と景気のいい事を言うべきですが、勝てる勝てないは、あくまでも相手との相対的な実力の差であり、また運でもあると考えます。だから、「来年、絶対勝てる」などという自信は全くありません。しかし、ただ今は勝つために必要なことはやっている自信はあります。これが勝つために十分であるかどうかは、勝った時に解るものです。確かに昨年度は勝つために方向は示してくれました。それを一つのベクトルとして確立するのは僕達の役目です。僕達の後輩のために、そして、何より僕達自身のために、向こう一年間努力していきたいと思っています。

平成元年度試合成績報告

対校	朝日レガッタ	3位
	関西選手権	優勝
	インカレ	4位
	全日本選手権	4位
Jr. エイト	中日本レガッタ	5位
	関西選手権	4位

— OBの方へお願い —

この度、現役ボート部員では、部の正装をブレザーに変えたいと思っております。諸先輩方の御意見も参考にしたいと考えておりますので、御意見、御協力よろしくお願い致します。

FAX (0775)43-1194 主務 杉山

— 今後の予定 —

1月2日、9時30分から、毎年恒例の初漕ぎを行います。

2月11日、卒業生送別会、OB総会
奮って御参加下さい。

編集後記

今回も「力漕」発刊が遅れたことをお詫び申し上げます。初めてのことで何かと大変なこともありましたが、部の運営の一環として大事な仕事をさせてもらい、嬉しく思っています。久しぶりにボート以外のことで集中して疲れてしまいました。次回の発行は遅れないように努力したいと思います。

部報 力漕
1989年11月 発行
発行 同志社大学ボート部大
津市瀬田3-2-30
(編集委員)
佐藤将人 吉田拓生
榊原雅也 原田昌彦
大竹 宏